

## 論文要旨

Reconsidering Teacher Education from the Perspective of  
Stanley Cavell's Emersonian Moral Perfectionism:  
Toward the Re-education of a 'Teacher as Reader'  
(スタンリー・カベルによるエマソンの道徳的  
完成主義から見た教師教育の再構築  
—「読む人としての教師」の再教育へ向けて—)

高柳 充利

2019 年

## 1. 本論の主旨

本論文は現代米国の哲学者スタンリー・カベルの提唱するエマソンの道徳的完成主義の観点を通して教師教育の原理的な再検討をおこなうことを目指すものである。

今日の日本社会において、教師は職業的なアイデンティティーの危機にさらされているといえる。それは、自らの職業的生に社会的使命や希望を見いだしづらい情勢のなかで、教師が困難な職業生活を強いられていることを意味する。危機にある教師が各々の日常の教育実践において言語との関わりを捉え直すことにより「読む人としての教師」として再生し、自己と社会の変容に関わり直す場としての教師教育のあり方を論じることが本論文の主たる眼目となる。その際、「真の教師」を「創造的読書」との関わりの中で吟味するエマソンのテキストを取り上げ、日常言語哲学の観点からエマソンを現代的に読み直すカベルの哲学を手がかりとする。

## 2. 本論の構成

全体は3部から構成される。本論で取り上げる教師の危機を措定し、カベル哲学の視点から教育教育を論じることの意義を述べる導入部（第I部）、危機にある教師の再教育における「読むこと」の重要性の捉え直しを、カベルの日常言語哲学の観点から論じる展開部（第II部）、先行する各部をふまえ、エマソンの道徳的完成主義から展望される教師教育の再構築の可能性を「読む人としての教師」として論じる結論部（第III部）の3部である。これらの部は、第1～6章ならびに結論から成り立っている。

## 3. 各部・各章の概要

第I部第1章では、まず佐藤学らの指摘する日本の教師の苦境を概観し、従来疑問視されることのなかった教師の職業的使命・社会的役割が、産業構造の変化とともに見えにくくなっている現状を確認する。<sup>1</sup>このことは、教師の危機を、教師の声に関わる二重のシニシズムとして捉える視点へとつながる。すなわち、フランク・マコートが回想録で描写した新任教師の苦闘に象徴されるように、教室にあっては教師の言葉が生徒に意味をなさず、一方教師教育は教師

の声が届かぬまま進められている、というシニシズムである。

こうした教師の声の喪失の背景には、教師教育を語る言語が、教員の資質の向上・それによる効率性の向上といった単調な論法の浸潤によってやせ細ってしまっていることがあると考えられる。すると教師教育が直面している危機を、言語の危機として捉え直すことができる。それは次のような岐路に直面しているという意味においての危機である。社会的慣習や風潮を含めた既存の言説の強化の道具として教師の役割を矮小化し、その中での自己満足に生きるか、それとも新しい教師の役割を語り直す試みとして、再教育の道へと踏み出すか、という岐路である。

「真の学者こそが真の教師」であるとするエマソンは、教師教育のひとつとして「創造的読書」を挙げている。エマソンのテキストを日常言語哲学の観点から読み直すカベルは、エマソンが述べる「人間の条件」に光を当てる。カベル哲学を「大人の教育としての哲学」という視点において論じるポール・スタンディッシュ、齋藤直子らの理論<sup>2</sup>をふまえると、次のように人間の言語の二重性が読み取られる。社会や他者から言葉を借りなければものを言うこと自体が不可能である一方、言葉を発することはとりもなおさず自己の表現であるという、二重性である。

そこで本論では、創造的読書を実践する者として、「読む人としての教師」の再教育を論じる。読むことにおいて、情報の収集という次元にとどまらず、新たな意味へとテキストを読み替える創造的読書を通し、教師は自らの声と出会い直す。そのような教師は、創造的読書の実践者——創造的に学ぶ者——として、生徒に自らを例示し、教えるという職業を作り直す声を聴き取る者へと変容して行くと考えられる。

第II部は、第2から第5までの章で構成される。

第2章では、教師教育のあり方を模索する手がかりとして、カベルによるJ.L. オースティンの言語哲学の再解釈をもとに論じる。教師の職業生活が困難であればあるほど、教師教育改革の議論においては教育現場の問題解決に必要な実践的知識の獲得が強調されがちである。カベルは知識 (knowledge) を諸実践へ

の対処を保障するような実体として扱うことが、懐疑主義の裏返しであるとの危惧を投げかける。確実性において知識を固定化・商品化しようとする趨勢を再検討するため、カベルの提起する「受諾」(acknowledgement) という観点において知識観の再考を試みる。知識を、自己の外側にある世界や他者から自己の内部へとインプットする(させられる)ものであるといった構図において捉えるのではなく、言語共同体への参与という行為に内在するものとして捉える。こうした観点から教師の再教育を考察するならば、それは最新の知識のアップデートとしてよりも、自らを取り巻く様々なテキスト——日常の教育実践をめぐる思考や言葉、それに関連した言説——との関わり直しという様相を呈する。

第3章では、いわゆる燃え尽き症候群や早期希望退職者の増加が孕む教師教育への課題を、カベルの哲学の形成に重要な意味をもつ後期ウイトゲンシュタインの言語哲学との関わりから論じる。カベルの解釈するウイトゲンシュタインの教示の場面から提起される教師と生徒の会話では、教師の懐疑主義的な日常言語の危機が含意される。生徒との知識の理解が決定的に決裂した局面において、教師が生徒にどう関わり直すことに向き合っていくことができるのか。カベルの議論は、教師が生徒と関わり続けるという課題に対して、教師の自信を態度や情緒の問題に回収するのではなく、生徒との関わり直しを、言語の規準への失望から生じた痛みからの回復として捉える。それは、規準の押し付けでも放棄でもなく、規準への追従(conformity)とそこからの反転(aversion)という二重性において自らの声を再獲得する過程に目を向けるものである。ゆえに、教師が教えることを続けていくための対処法を道具的に示すことが教師教育の役目であるという前提には疑義が呈せられる。「読む人としての教師」は、自らがかつて拒絶した思考に出会い直すなかで、テキストに新たな意味を読みとる。新たにされた展望と精錬された言葉のうちに、教師が生徒との会話(とその断絶)の場へと立ち戻る道筋が示唆される。

第4章では、教育の再構築において重視されるべきは教師教育ではなく生徒のそれであるべきであるとの視点に批判的に応答する。カベルによる J. S. ミルの『自由論』の解釈を通じて、よりよき生に向けた教育を二者択一の優先順

位づけから論じることの転換を試みる。功利主義は快樂の最大化に価値をおくにすぎないとの批判に対して、カベルはミルのテキストに含意される最大の問いは、人は何を本当の喜びとしているのか、その問い直し自体にあるとしている。すなわち、自らが望むものが本当に自己の欲望であるのか、自らの生きている社会が本当に自分が生きようとしている社会であるのか、といった問いの喚起である。エマソンの道徳的完成主義に含意される教師の再教育は、こうした意味において、幸福の追求にとって不可欠な修養 (cultivation) として、幸福概念そのものを含む文化 (culture) の作り直しの過程という側面をもつことが明らかになる。すると、若きミルが、失意——父のジェームズ・ミルの教育への失望でもあった——のなか、マルモンテルの回想録を読むことで転換点を迎えた、と自伝の記述にあるのは示唆的である。慣れ親しんだ世界を喪失する嘆きから出立し、再び自己と社会との結びつきを引き受ける過程は、「読む人としての教師」の再出発する過程と重なる。それは、テキストとの相互対話というかたちで、言語を通して世界と関わり直す過程である。

第5章では、測定可能な数値でもって説明責任を果たすことのみが教育活動を正当化する手段とされる趨勢にあって、正義の正当性自体（「正義の正義」）を読み直す対話の場である「正義の会話」というカベルの概念を教師教育の営みに重ねてみることを通して、「読む人としての教師」にとっての再教育を吟味する。カベルは、『正義論』の著者であるジョン・ロールズの論文「ルールの中の二つの概念」の議論を手がかりに、行為に先立ち正当化を担保するルールがないという点が人生の道徳的側面の特徴であるとしている。ゆえに教師教育において目指されるべきは、既存のルールの強化というよりも、何が（よりよい）教師の行為であるのかを語り直す声の獲得であると考えられる。カベルはロールズとの応答関係のなかで、恥の感覚に光を当てる。エマソンの道徳的完成主義における恥は、既存の正義の概念に従属し損ねた自尊心の反応というよりもむしろ、正義の会話に参加できずにいる、あるいはその参与自体がゆがめられてしまっていることに起因する感覚であるという。イプセンの『人形の家』には、恥を感じていた主人公のノラが、痛みと共に正義の会話への声を獲得する場面が描かれている。「読む人としての教師」は、そうしたテキストの声

に引き裂かれる——例えば、既存の正義を遵守しようとする自己と、より完全な正義から隔てられていることに気づいているが故にシニシズムに陥る自己との間で——なかで、自らも正義の会話へ参与する声を聴き取ることへと促される。

第 III 部は、第 II 部で示唆された「読む人としての教師」を教師教育への新たなアプローチとしてより具体的に描いてゆく。第 6 章では、監査文化の時代に教師が読むことの意味をエマソンの詩人の概念から明らかにし、ソローの実践の事例を手がかりに「読む人としての教師」の姿を描写する。

これまでの章で、教師の声の喪失への応答となり得る、「読む人としての教師」像を軸とした代替的な教師教育の可能性を論じてきた。しかしながら経済成長のための教育が強調されるなかで、読むという行為自体は常に危険にさらされていると考えられる。それは、一方において資質能力向上のために道具化され既存の教師教育の言説を強化してしまう危険性であり、他方において単なる現実逃避として教師教育の議論から退けられてしまう危険性である。こうした図式に陥らずに「読むこと」の意義を語り直すうえで、スタンディッシュによる「教育の二つのエコノミー」の議論は示唆に富む。監査文化が前提とする「閉ざされたエコノミー」に対して、「過剰のエコノミー」に見られる没頭状態は、読むことの実践における経験の強度を提示する。

エマソンが描写する「詩人」は、既存の言葉を受容しつつ新たな意味と世界を開くという意味で、「過剰のエコノミー」の動きを体現する。同様に、「読む人としての教師」はテキストに、「未達成だが達成可能な自己」としての教師の姿を認め、その教えを——かつて自らが退けた、自らの声を聴き取ることにおいて——超えていくことでよりよい教師への変容に導かれる。ソローは、エマソンを読むことにおいて教師としての声を再獲得したという意味で、「読む人としての教師」はいかに読むのかを例示している。ここにはさらに、「読む人としての教師」にとっての、読む時間、読む作品、読む場所、読む相手、に関しての議論が示唆されている。

結論では、I～III 部、全 6 章の議論の展開を再確認したうえで、教師の声の

喪失に応答する、代替的な教師教育における「読む人としての教師」像の重要性をあらためて強調する。そのうえで、筆者自身の教師経験についても事例として取り上げ、テキストに向き合うなかで危機を生き延びることの道筋が示唆された契機を描写した。教師の嘆きを夜明けへと変容させ得る教師教育とは、教師自身が教師と教育とを捉えなおす過程であると考えられる。それは、嘆きのなかで新たな声が聴き取られるようなテキストと向き合うことであり、教師としての生の出立であり、教師教育の再出発であるといえよう。

---

<sup>1</sup> Sato, M and Asanuma, S. (2000) Japan. In M. Morris and J. Williams (eds) *Teacher Education in Asia-Pacific Region: A Comparative Study* (New York, Falmer Press), 126.

<sup>2</sup> Saito, N and Standish, P. (2012) *Stanley Cavell and the Education of Grownups* (New York, Fordham University Press).